インタビュー

豊かさ、大らかさが戻ってきた

～年寄りも子どももゆったり暮らす村へ～

川内村商工会　井出　茂　会長

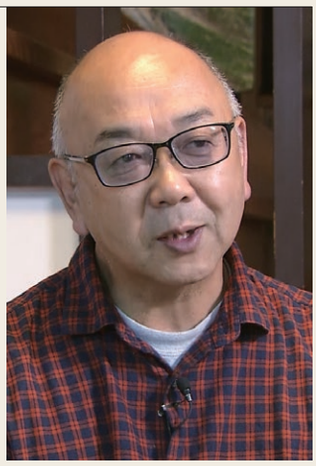
FUKUSHIMA × NAGASAKI University
福島と長崎大学
これからの10年

少し不便だけれど豊かな川内村に自信と誇りを持ち、それを子どもたちに伝えていくことが私たちの責務です。

「あっという間の10年」「もう10年」放射線を理解し生活は少しずつ変化

震災からの10年を振り返ると、あっという間と思う一方、もう10年かと長かった気もします。10年でいろいろなことが変わりました。個人的には保育園児だった孫は中学生に、高校生だった次男、次女は社会人になりました。私と妻はランニングが趣味でしたが、それぞれ体が少し故障し、お休みしています。

川内村は双葉郡のなかでいち早く帰還が始まり、今は震災前の約8割の人口になりました。そして豊かな自然、それを愛おしむ日常を取り戻すことができています。モリアオガエルが暮らす平伏沼、イワナが獲れる川、おいしい米や野菜が採れる農地。朝起きて、野良仕事に出かけ、帰れば誰かが置いていった野菜がある。お互いを思いやれる、大らかな川内村に戻ったと実感します。



もちろん変化はありますが、劇的ではなく少しずつ変わってきました。例えば、畑で採れた作物や山で採ってきたキノコや山菜などは、気になれば食品検査場に持ち込んで調べてもらうことが、今では普通のことになっています。放射線のことは気になるけど、そういう注意をしていれば、川内で安心して暮らせるんだと村民が思えるようになりました。

ここに至るには、長崎大学の折田真紀子さんや高村昇先生らの活動があったからこそと思います。帰村が始まった当初は、川内で採れたものから放射性物質が検出されると、自信を失う人がいました。でも折田さんは「大丈夫。キノコは食べましょう。まず検査しましょう」と声を掛けてくれました。こうした積み重ねで川内の食文化は継承されています。

多様性を受け入れ共存する土壌がある地域ぐるみで〝川内いいよ教育〟を

現在は、行政主導で新たな地域作りが始まり、工業団地への企業誘致や、イチゴやワイナリーなど新しい農業が始まりました。新しいことを受け入れるのも川内の特徴だと思います。多様性を認め合い共存していく土壌は元々あったのでしょう。だからこそ、長大の支援も受け止め、一緒になってここまで歩んでこれたのだと思います。

これからはこの環境を後世に残していくことが大切になります。ゆったりした時間、時の流れが遅く、不便なことを楽しみつつ、住民が成熟していく地域をみんなで作っていきたいと思います。そのためには、川内に自信と誇りを持ち、そのことを子どもたちに伝えていくことが必要です。

子育て世代なら、例えば自然が豊かで新鮮な食材が豊富であることに親が自信を持ち、その後ろ姿を子どもに見せるのです。私のような高齢者は、病気やケガをせず、健康に過ごすことで、年寄りが年寄りとして暮らせる村だということを示したいです。地域ぐるみで「川内いいよ教育」を続け、次の世代に伝えたいと思っています。

ワイナリーの収穫